

・モノグラフ 小学生ナウ

学習塾



vol.4-8

©1984(株)福武書店 教育研究所/加藤智穂・和田京子
放送大学教授 深谷昌志
東京都目黒区立菅刈小学校教諭 土橋 勉

目次

特集／入試制度の変遷	2
調査レポート／学習塾	
要約と提言	10
1. 塾通いの背景	12
● 放課後のすこし方	12
● 勉強に対する考え方	16
● どうして塾に行くのか	18
2. 学習塾での生活	20
● 塾での楽しさ	21
● 塾での生活	22
● 進学塾と補習塾	24
3. 塾の効果	27
● 塾への評価	27
● 塾のおよぼす影響	29
● 学校と塾	30
まとめに代えて	32
シリーズ／講座・子ども調査入門⑧ 調査の実施	33
資料1 調査票見本	38
資料2 学年・性別集計表	44

特集

入試制度の変遷

放送大学教授 深谷昌志



選抜の思想は変わっていない

学習塾の問題は、とらえ方によって、さまざまな展開を見せる。子どもたちが塾通いをする結果、遊びが失われる。あるいは、生活習慣が崩れ、夕食をひとりでとる子どもが増える。そして、塾で、先回りをしたかたちの勉強をするので、学校の勉強に緊張感が失われる。学校で学力差をあらわにしない教育をしていても、塾では学力別編成をとっているので、学校の理念が、塾の現実の前に崩れ去っているのである。

そして、それぞれの論理に沿って、塾通い

のもつ問題があらわになる。したがって、塾通いの分析には、いくつかの観点からの考察が必要となるが、いずれにせよ、学習塾通いが学歴社会の形成を前提とし、そして、より望ましい学歴取得のための入試を意識した現象であるのはたしかであろう。したがって、考え方によっては、学歴社会が続き、入試の状況が現在のままであっては、塾通いの解消を望みにくい感じがする。それだけに、塾通いを考える背景として、入試、というより選抜のあり方を、掘り下げておく必要があろう。

もっとも、人気のある学校に入学志願者が押しよせる傾向は、昔も今も変わりはない。なにしろ、入学定員の枠以上の志願者がいる

のであるから、そのこと自体に抜本的な改革を試みない限り、なんらかの方法で、入学者を選抜せざるをえない。

定員の何倍かの志願者がいる。そうした現実を目の前にした時、人間の考えることは残念ながら、そう変わりばえがしないものらしい。入試をめぐって、現在試みられている内申書重視、推薦制、学区制、総合選択、共通一次など、ほとんどすべての原型を歴史の中に見いだすことができる。

ただ、諸外国の選抜制度を視野に置くと、入試倍率の高い学校で、①とりあえず、全員を入学させ、学習の過程で淘汰していく、②学業成績以外の要素——例えば、クラブ活動への参加など——を思いきって重視する、③実社会での勤労経験を、選抜にあたって考慮に入れる、などが試みられているが、日本の場合、風土のちがいがあってか、そうした多面的な選抜が実施されたことはない。そして日本では、学力優秀な生徒を、受験勉強の弊害を除きながら、いかに合理的に選抜すべきかに、関心が集中してきた。こうした意味では、選抜思想の底流は、明治以降、基本的に変わっていないといえよう。そこで、以下、選抜制度の歴史の中からいくつかの試みを紹

介し、それのもたらした功罪を検討することにしよう。その前に、入試をめぐる状況を、簡単に概観することにしたい。

受験競争は、昔もきびしかつた

戦前の選抜制度には、大別して、①(旧制)中学入試と、②(旧制)高校入試との2つの節が認められる。いうまでもなく、前者は県レベルの、後者は全国レベルでの選抜の機能を果たしている。そして、日本の場合、現代的な意味での選抜の問題が登場するのは、おおむね、明治20年代後半に入ってからであった。

それ以前は、①学校制度の整備が遅れ、学校制度間の連絡が不明確であった上に、②大学および中学の教育水準が高く、それに見合う学力保持者が少ないなどの関係から、定員があっても有名無実で、求められる学力さえあれば、キャリアに関係なく入学を許可されるのが選抜の実態であった。

しかし、表1に示したように、明治30年代に入ると、正規の中学卒業生が増加すると同時に、高校へ入学を志願する者も増えて、高校入試の倍率は、3倍に迫っている。あらた

表1 高校入試倍率の変化

	中学卒業生(A)	高校志望者(B)	高校入学者(C)	高校志望率B/A	高校入試倍率B/C	現役入学率
明治29	1,824	2,159	1,210	118.9	1.78	—
30	2,494	2,943	1,350	117.9	2.18	—
31	3,067	3,178	1,580	103.6	2.01	—
32	4,206	3,635	1,793	86.4	2.03	—
33	7,787	4,914	2,093	63.0	2.35	—
34	9,444	5,052	1,702	53.5	2.97	—
35	11,131	4,574	1,646	41.2	2.78	—
36	12,468	4,298	1,670	34.4	2.57	—
37	10,461	4,076	1,480	39.0	2.75	61.4
38	9,901	4,709	1,470	47.5	3.20	49.3
39	11,028	5,151	1,475	46.8	3.49	46.2
40	11,713	6,004	1,847	51.3	3.25	45.2

(「文部省年報」より作成)

めてふれるまでもなく、中学進学者の割合は、当時、該当年齢の3%前後であり、それに加えて、落第制度がきびしかったので、中学入学者の中で、まがりなりにも卒業できる者は約半数、ストレートの卒業者はほぼ3割とみこまれる時代である。当然、高校志願者は、いわば一騎当千の強者ばかりであった。こうした状況下の入試倍率3倍は、現在の大学入試と比較にならないくらいのきびしさをもつ。

そのため、中学そのもので受験向けの教育が行われた上に、学校での補習教育もさかんで、東京や大阪などでは、私塾の流れをくむ学校の予備校化現象もみられている。したがって、表2に掲げたような浪人の問題も、すでに登場している。

同じころ、表1と同じような状況が、中学入試についても発生している。表3から明らかなように、明治30年代も後半に入ると、入

表2 高校入試の現役浪人別

	明治33年		34年		35年		人(%)
	志願者	入学者(%)	志願者	入学者(%)	志願者	入学者(%)	
現 役	2,820	1,113(78.2)	3,167	1,018(70.2)	2,834	1,001(63.4)	
一 浪	801	264(18.6)	1,187	367(25.2)	1,216	459(29.0)	
二 浪	113	43(3.0)	332	55(3.8)	320	100(6.3)	
三浪以上	7	3(0.2)	28	12(0.8)	68	20(1.3)	
	3,741	1,423(100.0)	4,714	1,452(100.0)	4,438	1,580(100.0)	

(「教育時論」明治35年7月15日32ページ、同35年12月25日26~27ページ)

表3 小学卒業者と中学入学者 明治33~42年

年度	尋常小学 入学者	尋常小学 卒業者	小 学 卒 業 率 B/A	中 学 受 試 者 C	中 学 入 学 者 D	中 学 入 学 倍 率 C/D	小学入学者中、中学 進学者率 D/A
	A	B					
明治33	(27) (28)	(31) (32)	% —	47,028	28,227	1.7	% —
34	831,820	550,567	65.8	50,632	29,669	1.7	3.6
35	1,091,219 (30)	616,985 (34)	56.6	53,225	31,726	1.7	2.9
36	812,702 (31)	700,443 (35)	86.1	49,271	30,619	1.6	3.8
37	829,906 (32)	769,188 (36)	91.9	50,142	31,908	1.6	3.8
38	962,288 (33)	811,560 (37)	84.4	51,585	29,041	1.8	3.0
39	1,021,949 (34)	842,998 (38)	82.6	54,791	29,597	1.9	2.9
40	1,088,024 (35)	878,659 (41)	80.6	58,116	30,791	1.9	2.8
41	1,082,759 (36)	279,665 (42)	25.9	59,173	31,764	1.9	2.9
42	944,864	530,519	56.1	58,381	31,144	1.9	3.3

(「文部省年報」各年度より作成。A欄の()は入学年度、B欄の()は卒業年度。
(明治41年から、尋常小学は6年卒業。)

試験倍率の全国平均が2倍に近づいている。ただし、中学の場合は、高校と比べ、学校間の序列がはっきりしているので、表4のように、同じ東京府立でも、一中は10倍近い競争率だが、三中は3~4倍、その他の中学は定員すれすれのような現象が生じており、各県のトップ中学の入試は、見せかけの平均2倍の競争率以上にきびしい選抜が行われている。

しかし、それでも、明治時代の入試は、ま

だのどかなほうで、学校そのものの定員を増やすなどの方策が試みられたものの、高校入試の倍率はついに2倍を上回り、中学入試も、1.5倍から2倍前後を推移している。

教育雑誌などを見ていると、すでに明治30年代に、一高合格者の氏名やら出身中学のベスト・テンなどの記事が目につくし、県教育雑誌には、ナンバーワン中学入試をめぐっての紹介記事がみられる。

表4 東京府立一中と三中の入試倍率

受験生	一 中			三 中			倍率			
	入学者	倍率	志願者	入学者	入学者の学歴(%)					
					尋 六	高 一	高 二			
明治42	1,005	154	6.5	343	140	50.7	34.3	15.0	0	2.5
43	1,132	171	6.6	439	145	59.7	26.8	10.7	0	3.0
44	1,164	161	7.3	495	135	66.6	24.4	8.9	0	3.7
45	1,220	155	7.9	503	136	63.2	26.5	10.3	0	3.7
大正2	1,306	155	9.0	583	166	76.5	19.9	3.6	0	3.5
3	1,465	175	8.4	668	169	80.4	16.6	3.0	0	4.0

(東京府立一中「創立五十年史」昭和4年、「東京府立三中一覧」大正5年)

推薦制の問題

今まで紹介してきたような状況に対応して、それぞれの時期に、さまざまな選抜方法の工夫がこらされている。ここでは、それらを個別に歴史的に跡づける余裕はないので、主として、旧制高校入試を中心に、推薦制度と総合選抜の問題を紹介することにしたい。

推薦制の導入は、高校——当時は高等中学——制度の発足と前後して行われている。例えば、明治21年、第二高等中学は、区域内の尋常中学校長——各県1中学なので、全部で5校——を招いて、「学業特等ニシテ、其學校長ノ保証スル者ニ限り」入学試験をせずに、学力相当の学年に仮入学させると伝達している。第一高等中学でも、明治22年の入試から、①

学区内の中学校在籍生で、②成績優秀の者に限り、③校長の推薦があれば、④無試験で入学させるという制度がとられている。そして、明治24年度を例にとると、一般からの試験は、受験者千百名の中から81名を合格させるきびしい入試となつたが、それとは別に、東京府立一中の22名、静岡中6名など、41名の推薦入学者を許可している。

周知のように、高等中学は、名前の通り、尋常中学の上級学校として設立され、いくつかの県立中学をたばねる管轄地域が構想されていた。そのため、地域ごとの中学校長会が高等中学で開催されることが多かったし、どの高校も7割以上が、区域内からの進学者であった。中でも、地域との結びつきの強い山口高等中学や造士館などでは、地元出身者の割合が9割を超える。

すでにふれた推薦制度は、このような尋常中学と高等中学との関連の中から登場してきたものだが、制度が軌道に乗るにつれていくつかの問題が生じ始めた。そのひとつは、校長が推薦権をもつ学校を、どの範囲に限るかの問題で、それまで、私立学校が対象外とされていたことから、開成中、郁文館、日本中学などの有力私立から推薦権を求める動きが表面化した。公立中学卒業生の入学を優先させ、私立校を閉め出すのは「私立学校撲滅論」だという主張である。

これに対し、文部省は、私立学校の現状は玉石混交であるから、無条件で特権を与えることはできないとして、推薦資格を希望する学校に、①教員の履歴書、②各教員の受け持つ時間、③教科書や時間配当、④生徒数などの書類の提出を求めた。その結果、書類審査により、高校へ推薦権をもつ学校か、そうでない学校かの差が生まれ、それが、それぞれ

の学校の格づけに通することになった。つまり、推薦制を契機として、私立学校が、県立中学をモデルとして、学校改革を進めることになった。

その結果、まず、トップの私立学校が推薦の資格を獲得し、その後、次のランクの学校がランク入りをめざすという形で、私立学校の序列化が進みはじめた。それと同時に、それまで創立者のカラーを残し、私塾としての雰囲気を留めていた学校が、公立学校とほとんど同じ雰囲気となり、私立のもつ独自性が失われる現象も生まれはじめた。こうした意味では、推薦制の制度化により、中学教育の多様性が失われ、公教育の画一化が進められたと言っても過言でない。

なお、推薦制度は、明治29年2月に、「尋常中学卒業生推薦規則」として法令の中に組みこまれたが、明治31年に、この制度の運用は定員未満の場合に限ると法令を改正し、34



年5月には、推薦制度そのものが廃止された。その後、明治43年、受験競争の過熱を冷却化する目的から、定員の5分の1に限り、推薦制の導入を復活させることになったが、十分な機能を果たせないまま、大正6年には、定員枠の20分の1に対象を限定するなどのように、試行錯誤にも似た経過をたどっている。

時代がやや前後すると、明治24年の全国高等中学校長会議に、文部省から、推薦制導入をめぐる是非が諮問された。その席上、多くの校長たちから、推薦枠を拡大すると、低学力の者が入学するようになり、大学へ進学できない者が生まれるとの懸念が表明され、枠の範囲を厳格に守ることで合意に達している。

上級の学校が、学力の水準を一定レベル以上に保とうとすれば、この会議の結果と同じように、推薦の枠を狭くしづら態度が表面化してくる。しかし、そうなれば、当然、推薦に頼るより、自分たちの基準で選抜を行う傾向が強まる。高校への推薦制が機能しなかったのは、こうした高校側の態度にも一因があろう。

なお、推薦制と同じ文脈の選抜方法の改善策として、内申書重視の問題がある。これは、高校でなく、中学の問題だが、大正10年代に入り、中学の現役入学率が4割を下回る状態を迎えて、中学、特に有力中学への受験難が大きな社会問題になりはじめた。文部省は、昭和初め、内申書を主に、口頭試問を加えて選抜を行う方向を強めた。しかし、実施後ほどなく、中学校側から内申書に信頼を置けないとの異論が強まりはじめた。①内申書そのものを小学校側が底上げする傾向が認められる、②学校間の格差があり、学力のついている学校とそうでない学校との間の是正がむずかしい、③内申書の秀れた者が、かならずしも、中学入学後、予期したほどの伸びを示さないなどが、主要な問題点であった。そして、こうした異論の正当性を裏づけるデータが公表されたりして、結局、昭和10年代に入ると、



内申書の比重を減らし、筆記試験が復活して、それ以前とさして変わらない選抜制度が採用されることになった。

総合選抜をめぐって

すでに述べたように、旧制の高校教育は、一種の地域主義を根底として運用されていたが、明治26年、文部省は、訓令四号を発し、現状に応じる形で、出願にあたっての学区制の廃止を決定した。しかし、その結果、表5に示したように、全国の志願者が(旧制)一高へ集中する弊害が生じはじめた。

そのため文部省は、明治35年4月「総合選抜制」の実施を発表している。これは、①志

表5 選抜制開始前の高校入試倍率

高等学校 年度	第一	第二	第三	第四	第五	第六	第七	山 口
明治31	2.32	2.60	1.60	2.11	1.64			1.31
32	2.24	1.79	2.28	1.97	1.91			1.70
33	3.58	2.08	3.84	1.81	2.95	2.62		1.20
34	4.35	3.79	2.81	2.89	2.42	1.98	3.53	1.99

(「文部省年報」各年度より算出)

願者は志望学校・学科名を2つ以上申告する、②文部省が共通テストを実施し、その結果に基づき、③第一志望優先の原則で、進学先を決定する制度である。

総合選抜制の採用の結果、それまで存在していた学校間の学力格差は是正され、どの高校へ入学した生徒も、学力面でさほど開きが認められないようになった。そうした意味では、総合選抜制の導入は、学力水準の均衡化や教育機会の均等に貢献したということができよう。

こうした反面、それまで、それぞれの地方色をもっていた高校カラーが薄れはじめただけなく、一高のように第一志望の者のみから構成される学校と、第二志望の入学者の比率の高い学校との新たな格差が生まれはじめた。それと同時に、なんとしても一高へ入学するために、第二志望で通っても、入学を辞退し、次年度を期す生徒も登場した。その結果、第一志望で通る点数に達しないと、一高へ入学できないため、一高への入学が、かえってきびしさを増す状況も生じてきた。

総合選抜制のこうした長短を勘案して、文部省は、明治41年から、従来通りの全国を単位とした入試制度の再開を発表している。それと同時に、それまで各部共通であった入試科目に、国・漢、外国語、数学の共通科目に、第一部は地理・歴史、第二部は物理・化学の選択科目を加えることになった。

しかし、総合選抜制の廃止により、ふたた

び、一高へ志願者が集中する傾向が顕著となり、大正4年には、志願者2,285名に対して入学者が350名、大正6年は2,256名に対して360名という状況が出現した。そのため、文部省は、大正6年から、総合選抜制度の再開に踏み切り、そして、大正8年には、選抜制の廃止と、朝令暮改に似た軌跡をたどっている。そして、大正14年から、かつての国立大学の一期、二期に相当する一班、二班に分けた入試制度の実施も試みられている。

このへんで、選抜方法についての紹介を閉じたいが、昭和に入ってからのできごととして、昭和2年、文部省は、高専や大学の入学者選抜方法を改革し、学科試験に、出身学校からの内申書、口頭試問などを加えて、入学を決定することとし、昭和16年から、これに、身体検査が追加されたという動きが目につく。

なお、第二次大戦後、アメリカでの選抜にヒントを得て、昭和23年から29年まで、高等教育を受けるに足る素質を測定する手段として、進学適性検査が実施されていたのは周知の事実であろう。

入試は本来、非合理なもの

これまで、かけ足で、選抜方法の改革の動きをたどってきた。率直に言って、それぞれの時期に行われた改革の試みが効を収めたとは言いたい。総合選抜にせよ、推薦制により、企画段階では、現状を改善するつもりで

練られたものなのであろう。しかし、いざ実施の段階に入ると、予想外の事態が出現する。

入試とは、きわめて群衆心理的な作用の働きやすい社会現象である。そのため、机上プランの段階で計算に入っていない心の動きが、理想論の一角を崩し、それが、かえって問題を複雑にする傾向がみられる。

たとえば、総合選抜にあたって、(旧制)一高に対して示された強い愛着心を非合理と言ってしまえばそれまでだが、こうした非合理的な感情をふまえない合理的な制度改革は、むしろ、事態を陰惨にする可能性が強い。

それと同時に、明治以降、百年の選抜制度の歩みは、弊害を除去するために結果としては画一化を進める中央の政策と、独自性を守ろうとした学校サイドの動きとの相克の中でとらえることができる。

それぞれの学校の動きが、地域性にからんで、非合理的な面を含んでいるのは否定できない。それに対し、国レベルの政策は、論理的に整合しており、納得できるものが少なくない。しかし、こうした政策が実施されるにつれて、学校の独自性とか、学風とかが、崩れ去ったのは、すでにふれたとおりである。

定員以上の志願者がいる。しかも、できることなら、少しでも、社会的に評価の高い学校へ入学したい。こうした事態が変わらない

限り——変わることはないと思うが——、選抜方法の改革には、おのずと限度がある。少なくとも、現行の弊害をすべて除去できるような起死回生の策などのあろうはずがないのである。

したがって、現状をやや改善できるという程度に、選抜方法改革の効用をとらえておく必要があろう。

それと同時に、内申書や学区制など、多くの改革が試みられても、10年、あるいは、20年を単位に考えると、結局、学校を単位とした素朴な筆記試験の形に回帰していく。こうした経過を考えると、一回だけの試験で入学を決定する仕組みに批判を加えるのは容易だが、群衆心理のからみやすい入試制度の性格を考えると、古くからあって最も素朴な筆記試験の良さを、再確認する必要があるのかもしれない。それでない場合には、選抜の仕方というような小手先の技術でなく、学校制度改革を含めた抜本的な手直しが望まれよう。

入試、しかも、明治以後の旧制高校に限っても、上述のような経過が認められる。本号では、学習塾通いを問題にする。塾通いの是非を論じるさい、シャープな問題意識をもつことも必要だが、そのいっぽうで、今までふれたような考察をクールに進める態度も必要であろう。

調査レポート／学習塾

放送大学教授 深谷昌志

東京都目黒区立菅刈小学校教諭 土橋 稔

要約

①

「勉強がわからない時もある」が4割



「わからないことが多い」を含める
と、49.6%と、ほぼ半数の子どもが、
勉強がわからないことがあると答え
ている(図4)。これが、学習塾通い
の背景であろう。

②

通塾率

通塾率は、4年生で38%、5年生
48%、6年生55%と、学年が上がる
につれて増加している(図3、図11)。



③

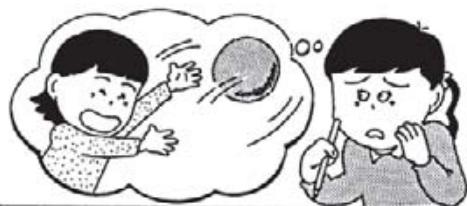
通塾の理由



おとなになってからのことを考え
ると、学力をつけておいたほうがよ
いと思うから、という理由で通塾し
ている子どもが多い(図7)。

4

塾通いの功罪



勉強ができるようになったかもしれないが、遊び時間が減ったように思う(図19)。

5

学校との対比

学校のほうが先生の教え方がうまいし、友だちもできる。それに、塾へ行くと勉強が嫌いになる感じがする。子どもたちは、塾よりも学校のほうがよい、とこたえている(図20)。



6

提言

6年生の子どもたちの半数が通塾している姿は、理由はともあれ、正常とは言いがたい。そして、子どもたちは、学校の良さを十分に認めながらも、学力をつけるために通塾している。したがって、学校としては、従来以上に、子どもたち一人ひとりの学力を伸ばすのに全力を注ぐべきであろう。

それと同時に、子どもの通塾を支えているのが親たちの態度であることを考えると、親

6

進学塾と補習塾



塾の多様化が進み、補習塾へ行く子(41%)と進学塾へ通う子(37%)のように、子どもたちが層化される傾向が目につく(図16)。

たちと、子どもの教育についてもっと語り合う必要を感じる。長い人生の中で、真の学力とは何なのか、あるいは、子どもの成長過程の中で、今、何をすることが大事なのかといったテーマを親たちと話し合い、そして納得してもらうことが重要であろう。こうした地道な話し合いが、塾通いをする子どもの割合を減らすための近道のように思われてならない。

サンプル数 (人)

学年/性	男 子	女 子	計
4 年	226	240	466
5 年	314	277	591
6 年	330	301	631
計	870	818	1,688

調査概要

対象●東京の小学4、5、6年生
時期●昭和59年4月～5月
方法●学校通しによる質問紙調査

1. 塾通いの背景



学習塾ブームの中で、子どもたちの塾通いは、学習のひとつのスタイルとして定着してきた感が強い。高学年になると、どこのクラスでも、半数近くの子が、塾に行っているようだし、毎日の授業場面のリード役は、学習塾で進んで勉強をしている子どもたちが多い。また、学力の遅れがちな子どものフォローは、補習塾が担っているという感がないわけでは

ない。

ここでは、「第二の学校」としてのそうした学習塾の存在をふまえて、子どもたちにとつて塾のもつ意味を探っていきたいと思う。

まず、第1章では、子どもたちが学習塾に通うようになった背景を、学校を中心として、いくつかの要因から探っていくことにしよう。

放課後のすごし方

「ねえ、今日あいてる?」「遊べる?」帰りの会が始まるころになると、子どもたちが遊びの約束をしているのを耳にすることが多い。

最近は、アポイントをとっておかないと、遊びが成立しなくなった。その結果、原っぱや町角に行くと必ずだれかがいて、遊びが始まるといった、かつての子どもをめぐる風景

はみられなくなってしまった。

それにしても「今日あいてる?」に対して、「今日は○○○があるからだめなの」という言葉が聞かれる。子どもたちの放課後はかなり過密のようである。

そこで、放課後の実態を知るために、子どもたちの1週間の予定を記入してもらうことにした。

(質問：あなたは習い事（ピアノ、そろばん、習字、スイミングクラブ、野球など）や学習じゅくに行ったりしていますか。1週間の予定を教えてください。)

	行くところ（なにを習うか）	時間（家を出る時間～家に着く時間）
月	じゅく（国語）	3:45～7:30
火	バスケット同好会	3:00～5:00
水	じゅく（理科・社会）	3:45～7:30
木	ピアノ	4:30～5:00
金	じゅく（算数）	3:45～7:30
土	合唱教室	1:45～4:30
日	日曜学校（教会）	10:30～12:00

これはひとつの例であるが、毎日予定が入っており、それも、勉強、スポーツ、音楽、

教会と、バランスよくおさまっている。
もう少しこいつかの例をあげてみよう。

（スポーツ中心型）

	行くところ（なにを習うか）	時間（家を出る時間～家に着く時間）
月	スイミングクラブ	5時～8時
火	スイミングクラブ・パールホール	5時、6時 8時 * 15時～16時
水		
木		
金	ピアノ・スイミングクラブ	3時半～4:40 + 5時～8時
土	パールホール	10時30分～2:30分 案内手
日	スイミングクラブ（朝かん）・バスケット	1時～9時45分 決まり

（学習塾中心型）

	行くところ（なにを習うか）	時間（家を出る時間～家に着く時間）
月	じゅく（さんすう）（もん（生物））	4:30～9:00 3:30～4:10
火	じゅく（二く二）	4:30～9:00
水	じゅく（りか）	4:30～9:00
木	スイミングクラブ（もん（生物））	4:50～7:10 3:30～4:10
金	じゅく（さんすう）	4:30～9:00
土	じゅく（しゃかい）	5:00～9:00
日	じゅく（四科）	8:30～3:30

(長時間学習型)

月	行くところ (なにを習うか)	時間 (家を出る時間～家に着く時間)
月	なし	なし
火	じゅく(社会・理科)	P 5:30～10:00
水	じゅく(算数)	5:30～10:00
木	じゅく(算数)	5:30～10:00
金	なし	
土	じゅく(国語)と国算のどちらか	：3:00～9:40
日	じゅく (テスト)	A 7:30～P1:00

(習い事中心型)

月	行くところ (なにを習うか)	時間(家を出る時間～家に着く時間)
月	バスケット (もん)(角)えいご	3:30～4:30(4:45)～5:00～6:00
火		
水	お茶	3:30～6:30(だいたい)
木	バスケット (もん)	3:30～5:30～6:00
金	えいご	5:00～6:00
土	ピア)	2:00～5:30～3
日	教会	9:00～10:30～3

このように、ほとんどの子どもたちが、学習塾、あるいは習い事、そしてスポーツクラブといったように、いろいろな放課後の予定をもっており、図1で示したように、月曜日から土曜日まで、半数近くの子どもたちが、どこかに何かをしに出かけている。

また、1週間のうち、1人が何日予定をもっているかを調べてみると、表1に示したように、4年生で2.7日、5年生で3.1日、6年生で3.2日。全体で3.0日となる。つまり、平均して1週間のうち約半分の日に個人的な予定がつまっている。

いっぽう、1週間の予定がぜんぜんなかった子は、全サンプル1,688人中172人(10.2%)と、1割に限られていた。

これでは前述したとおりに、子どもたちの約束がなかなか成立しないのも、無理のない

話であろう。遊び場もなく、友だちもいないのであるから、学習塾や習い事に一層拍車がかかるのも、うなづけるところである。

また、種類別では、図2に示したように、学習塾が一番多く、続いて、スポーツクラブ、そろばんの順位となる。

これまでみてきたように、子どもたちは放課後の時間をさまざまな学習活動に費やしていた。そして、その中では、学習塾の割合が一番高い。

本調査では、図3が示すとおり、約半数が学習塾に通っている(1,688人中806人)。しかも4年生では、38%、5年生で48%、6年生は55%と、学年が上がるにつれて通塾率が高まり、6年生では過半数を超える状況を迎える。

図1・放課後の予定の有無

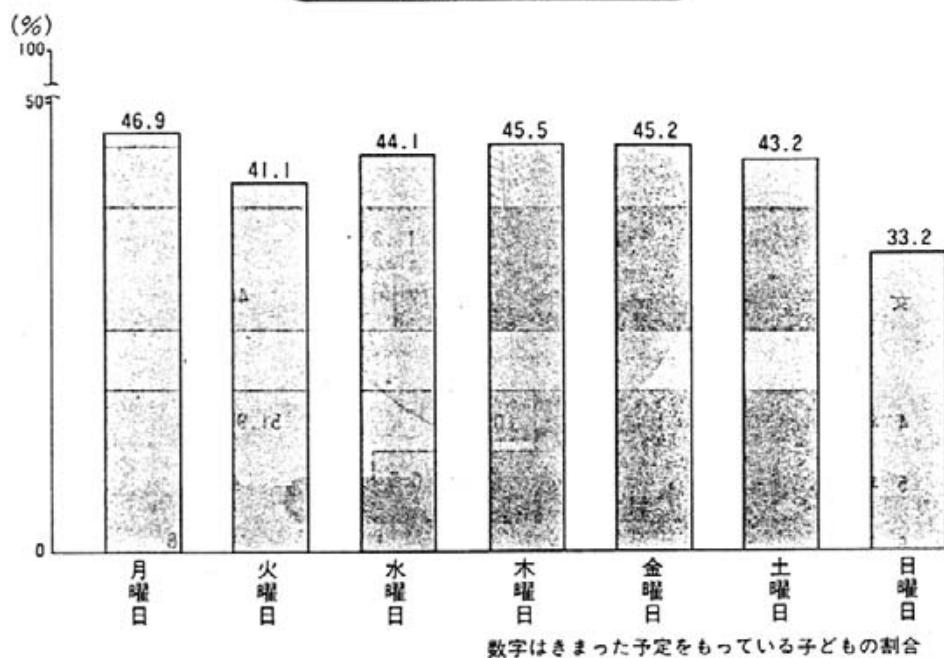


表1・1週間のうち、予定のある日数

項目	学年	4年	5年	6年	全体
サッカーブール数		465	592	638	1,695
予定日数の記入数		1,235	1,809	2,026	5,070
1週間に何日予定ある(記入数÷人数サンプル)		2.7日	3.1日	3.2日	3.0日

図2・放課後の予定の内容

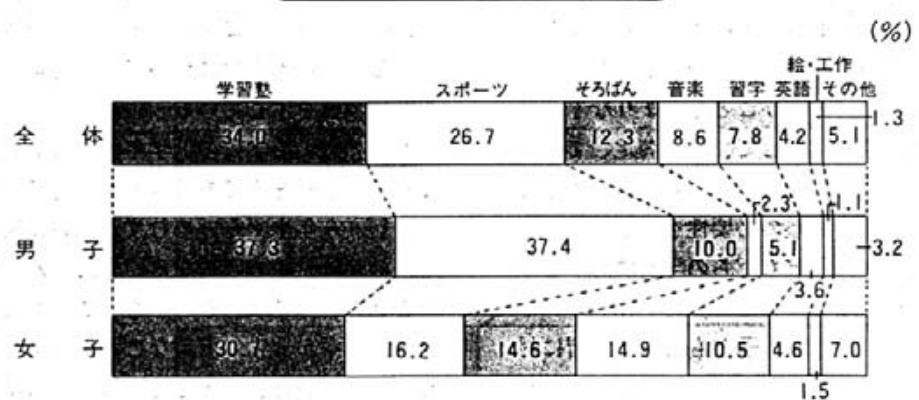
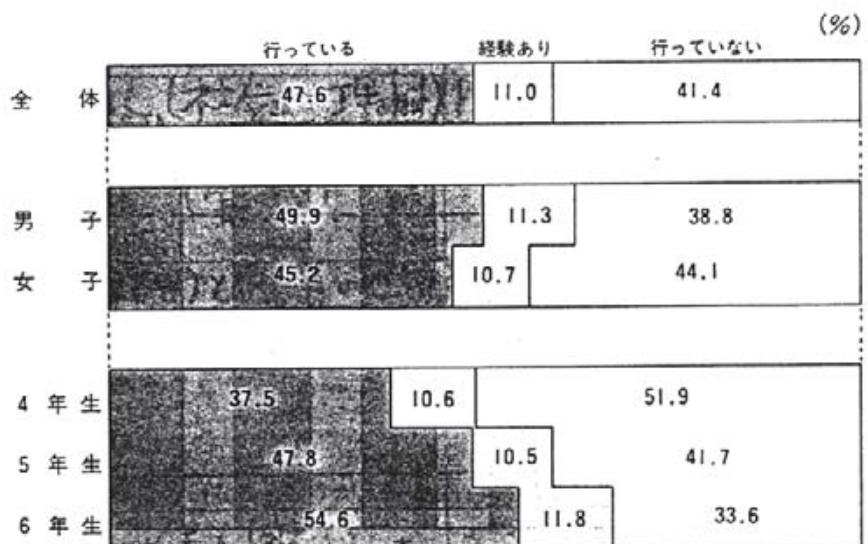


図3・通塾の現状



勉強に対する考え方

このように、学習塾に向かう子どもたちの学校でのようすはどうであろうか。学校での勉強が理解できていないから、塾通いをしているのではないか。そうした疑問をとらえようとしたのが図4である。

「全部わかる」とその自信のほどを表している子どもが約6%。いっぽう、「わからないことのほうが多い」と、理解できずに困っている子どもも6%である。そして、ほかの9割近くの子どもたちは、「わからない時もあるが、だいたいわかる」と答えている。また図には示していないが、学校の勉強はわかりすぎてつまらないということもありなく(85%)、学校の勉強に対して、ほぼ満足しているようすを表している。したがって、こうした数値からは、学習塾の必要性を感じにくい。

そこで、次に子どもたちの学習に対する意識をみていくことにしたい。

図5が示すように、子どもたちの学習に対する意識はきわめて高く、特に「勉強ができ

ないとおとなになって困る」と考えている子どもたちは、実に97%にものぼっている。

そして、その意識を裏づけるかのように、「学校の勉強がわからなかった時はどうするか」という質問に対して、「そのままにしておく」という子どもは約1割しかおらず、残りの9割は、わからないままでは困るからなんとかしようとしている(図6-1)。しかし、その方法を聞いた図6-2の結果では、「家の人に聞く」が75%で一番高く、以下、自分で調べる、友だちに聞く、と続き、一番頗りになるであろう先生については、約4割と一番低い数値を示している。

もっとも、小学校の低学年のうちなら、親たちでも勉強を見てあげるのも可能であろう。しかし、6年生ぐらいのむずかしい問題では、普通の親はお手あげになる。また、わからないことを自分で調べることも、これまた言うはやさしいが非常に困難なことに属する。これらの結果から、「子どもたちの学習に向か

図4・学校での学習の理解度

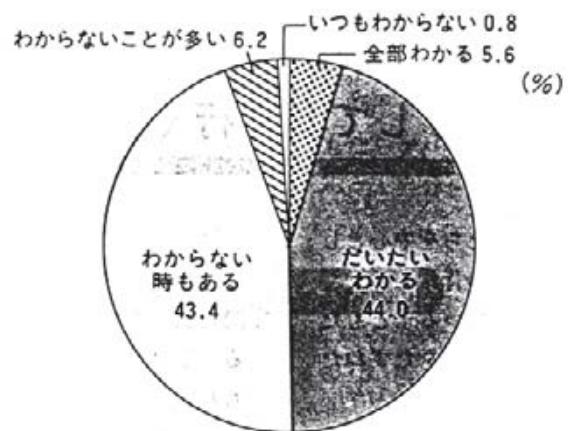


図5・「勉強」についての意識

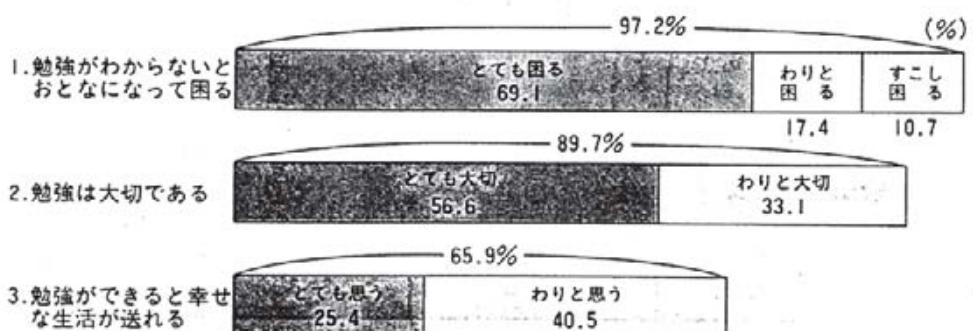


図6-1・勉強がわからない時は？

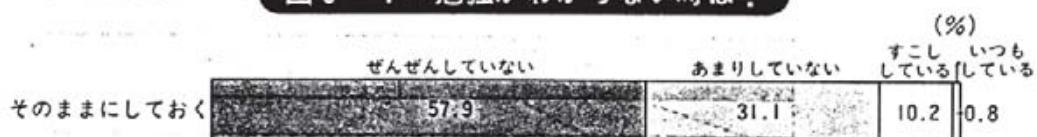
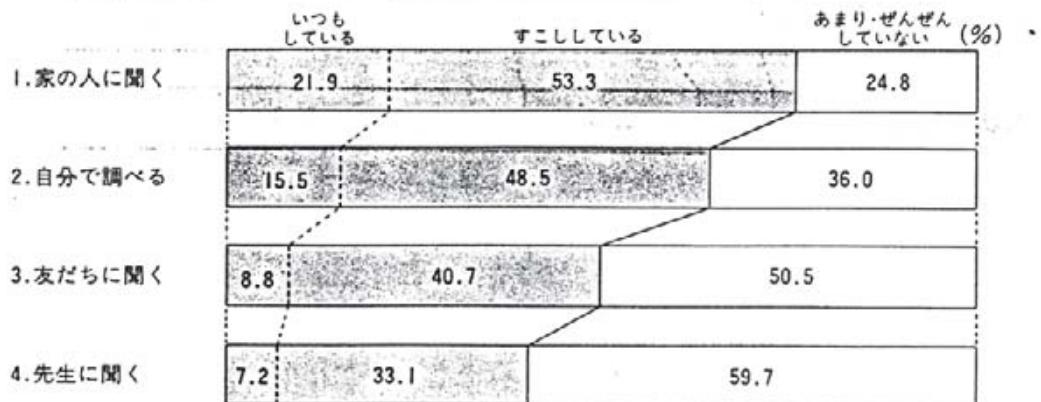


図6-2・解決方法



う意識は非常に高いのだが、近くに良きアドバイザーカ「いない」ということが言えよう。

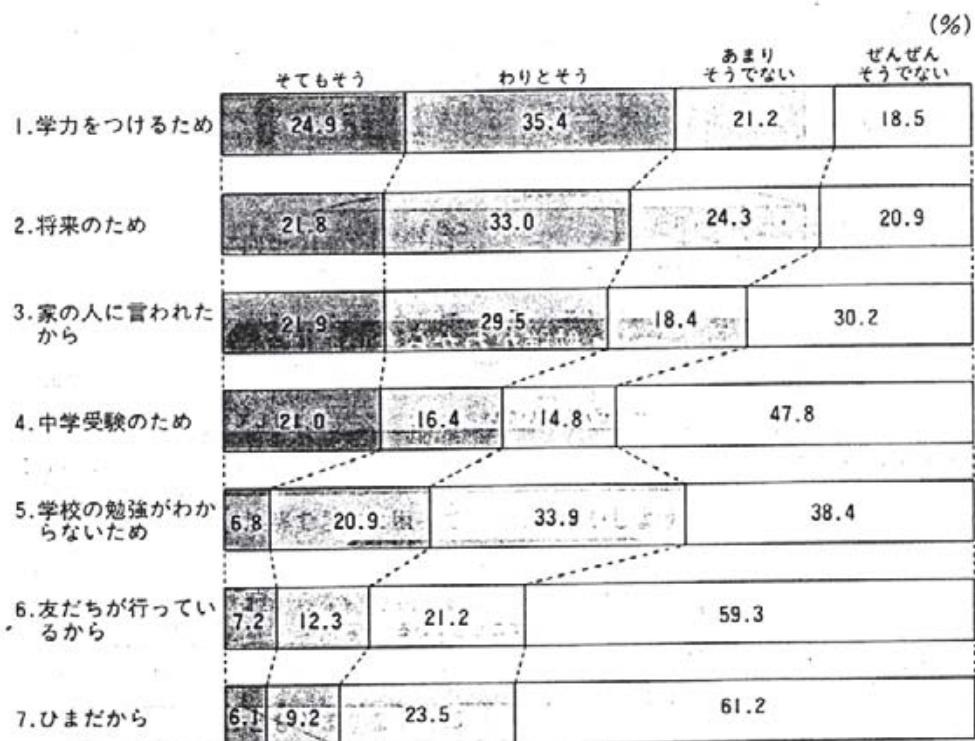
そしてそのことが、子どもを塾に向かわせているひとつの要因と考えられる。

どうして塾に行くのか

生活面、学習面と、子どもたちを中心とした2つのスポットから塾通いの背景を考えてきた。さらに、学習塾に行っている子どもたちに、塾へ行くようになった理由をたずねた結果が、次の図7である。

図が示すように、第1位に学力につけるため。2位に将来のためと、当人の積極的な意志の表れとみられる要因が理由の上位を占める。とはいっても、第3位には、家の人に言われたからとこたえる子どもたちも、「わり

図7・学習塾に行くようになった理由



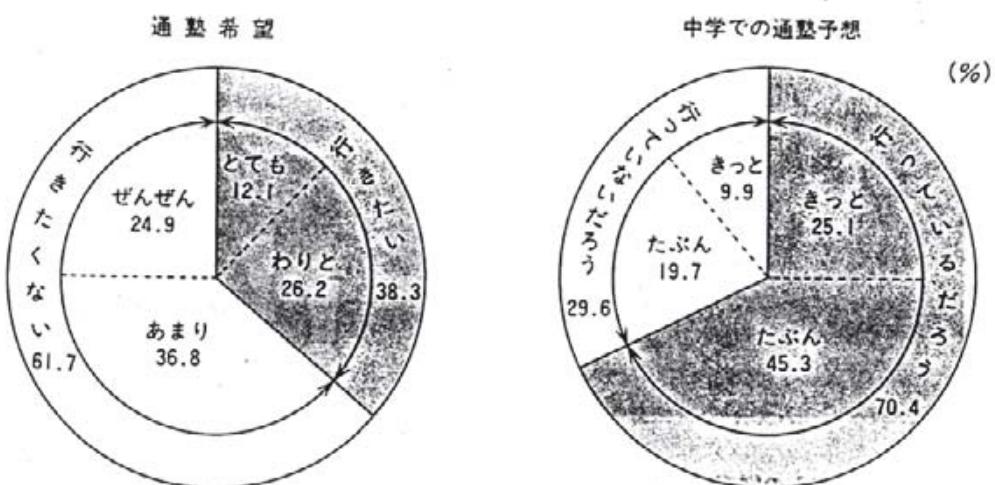
「そう」を含めると、半数程度に達し、親の影響力も無視できない。

それにしても、「友だちが行っているから」とか「ひまだから」というような中途半端な考えは、ほとんどなく、子どもたちが意欲的に

塾に向かっているようすがうかがえる。

そして、図8が示すように、通塾希望者は4割近くまで達し、さらに、7割を超える子どもたちが、中学に入ったら、塾に行っているだろうと自分を予想している。

図8・通塾への志向



2. 学習塾での生活



夜、9時すぎごろの電車に乗ると、同じようなカバンをさげた子どもたちのグループを見かけることがある。男女で仲良く話している、漫画を読んでいたり、おかしを食べていたりと、なかなか楽しそうなようすである。かつて、地域の広場には、学校を離れたひとつの子ども社会があった。それがなくなった今、学習塾が、その広場の肩がわりをしているのでは、などと考えてしまう。

しかし、そんな思いと同時に、「この子どもたち、家に帰るのは10時ごろなのかな」とか、「夕食はどうしたんだろう」などと、どうにも子どもらしくない生活に対して、ある種の不安を感じるのも、また、たしかである。

この章では、子どもたちが、塾での生活をどのように送っているのかを、みていくことにしたい。

塾での楽しさ

まず、塾に行くのは楽しいかどうかを聞いたものが、図9である。全体では、3割近い子どもが「とても楽しい」と思い、また、「わりと楽しい」を合わせると、4分の3の子どもたちは、楽しく塾通いをしているようである。この結果は、これまで行った調査の「学校での楽しさ」とほぼ同じ程度の高さを示している。

学習塾が、学校とほぼ同様な楽しさをもっている。そんな学習塾の楽しさとは、どこにあるのであろうか。それを知るために、ここでは、図9の結果をもとにして、子どもたちを、「楽しい」群（「とても楽しい」とする29%）と、「つまらない」群（「あまり楽しくない」と「ぜんぜん楽しくない」を合わせた26%）に分けて、それぞれの気持ちをたずねてみた。その結果が図10である。

塾が楽しいとする子どもたちは、自分から進んで学習塾に行っている子どもたちであり、楽しさの第1位は、勉強に対して興味をいだけたことにある。77%の子どもが、勉強が好きになったとこたえている。また、それと共に、発表力がついたと、自分の力の伸びを確認している。そして、もうひとつの大きな楽しみは、新しい友だち関係ができたことだともこたえている。塾で、違う学校の友だちと会えるのがうれしいという子は、70%を超える。

いっぽう、楽しくないとする子どもたちは、親に言わされて塾に行っている子が多く、外遊びの欲求が強い。また、勉強も好きになれず、力がついたことも確認できない。そして、塾で新しい友だちが生まれなかったという子どももある。

図9・塾に行くときの楽しさ

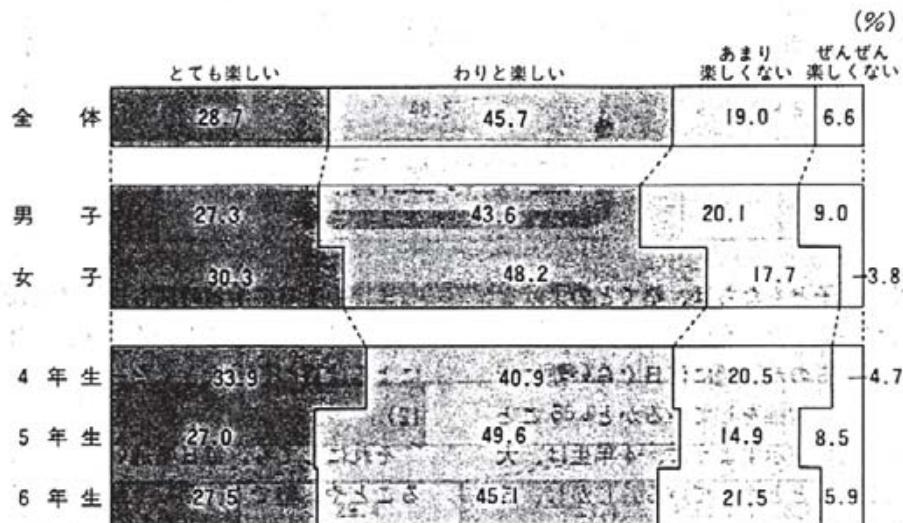
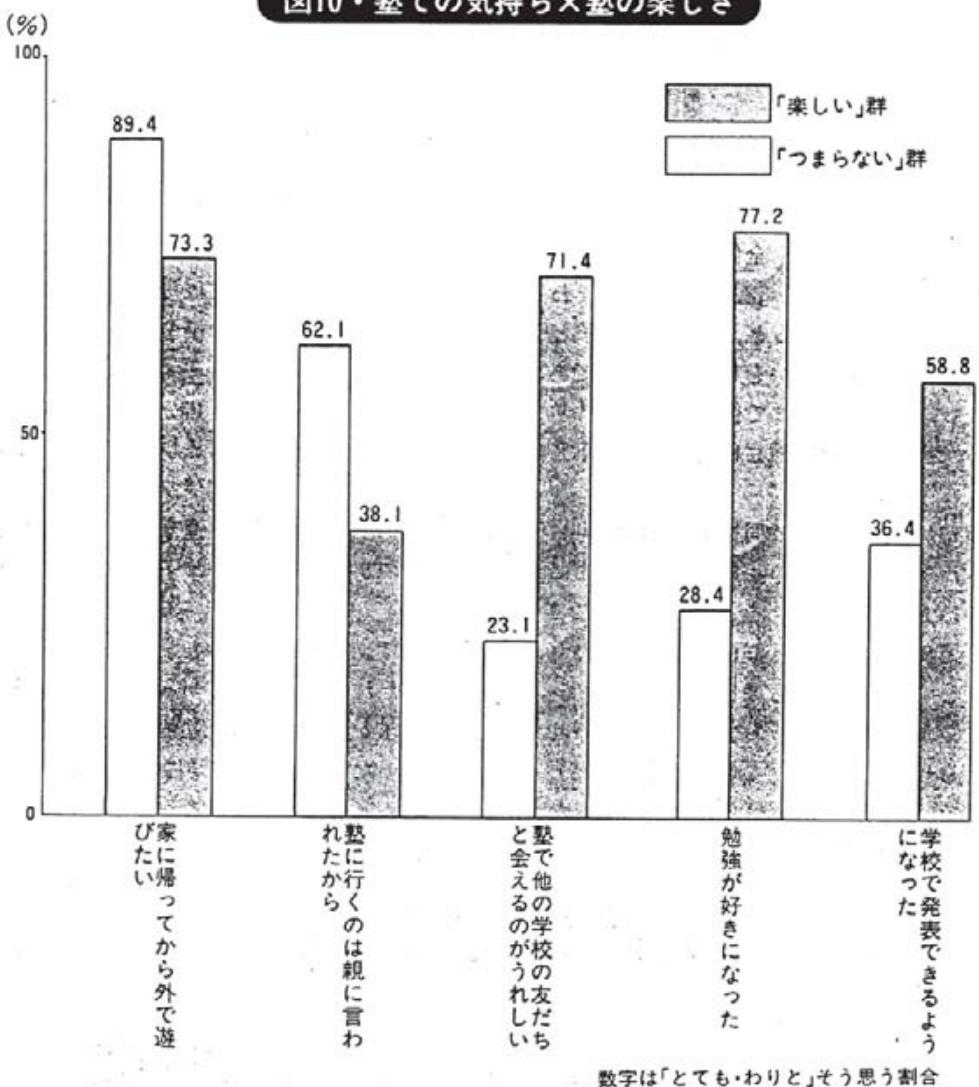


図10・塾での気持ち×塾の楽しさ



塾での生活

それでは、子どもたちは、塾でどのような生活をしているのだろうか。

まず気になるのが、週に何日ぐらい塾に行き、どのくらい勉強をしているかということであろう。図11が示すように、4年生は、大部分が週2回にとどまっている。しかし、5年生で2回と同時に3回、6年生になると2～3回とともに4回が多くなり、また5回も12%というように、個人による差が大きくなっている。

また、1日の学習時間も、通塾回数と同様に、高学年になるほど長くなり、また、個人によるばらつきも大きくなってきている（図12）。

それにしても、毎日塾通いしている子がいることや、塾で4時間以上勉強する子が、6年生では7%もいることには驚かされる。こうなってくると、その子にとっては、塾が、main school であり、学校がsecond school ということになるのでは、という感じがする。

学習時間が長くなると、当然ながら、帰宅時間も遅くなってくる(図13)。さすがに、4年生では9割以上が、7時ごろまでには帰ってきてているが、5年、6年になると徐々に遅くなり、6年生では、9時をまわってから帰宅する子が、24%と4分の1近くに達する。

そして、夕食についても、図14で示すとおり、ひとりで食べる子どもが、4年生でも7%、5年生で14%、6年生では24%にもなる。これは、前述した9時すぎに帰宅する子の割合

と、ほぼ一致した結果である。

それでは、このような塾通いは、どのくらい続いているのであろうか。それを示したのが図15である。全体的には、3年、4年といった中学年から通いはじめるケースが多くみられるが、1年生からという子どももけっして少なくない。4年生で塾に行っている子の4分の1は、1年生から塾通いをしているのである。

図11・1週間の通塾回数

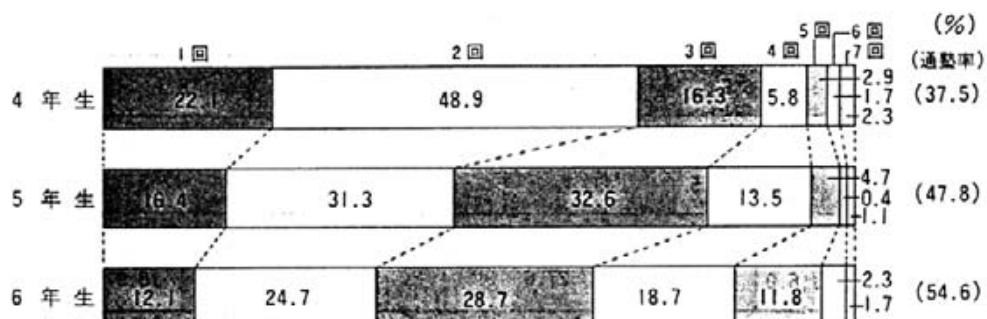


図12・塾での学習時間

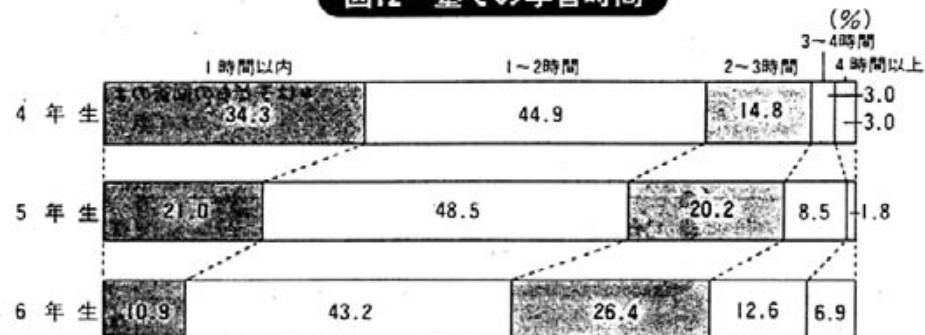


図13・帰宅時間

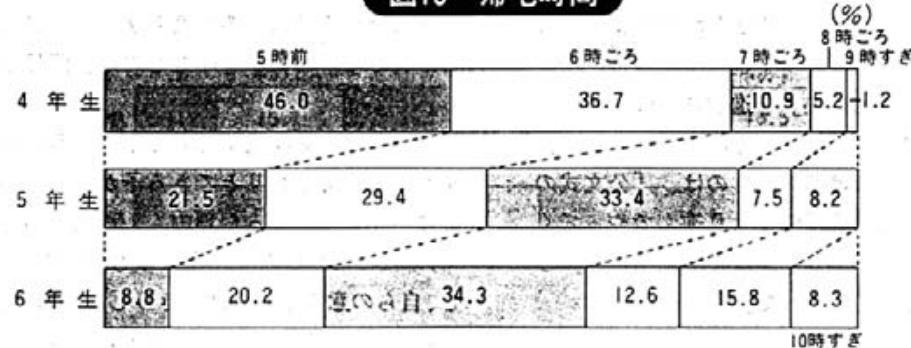
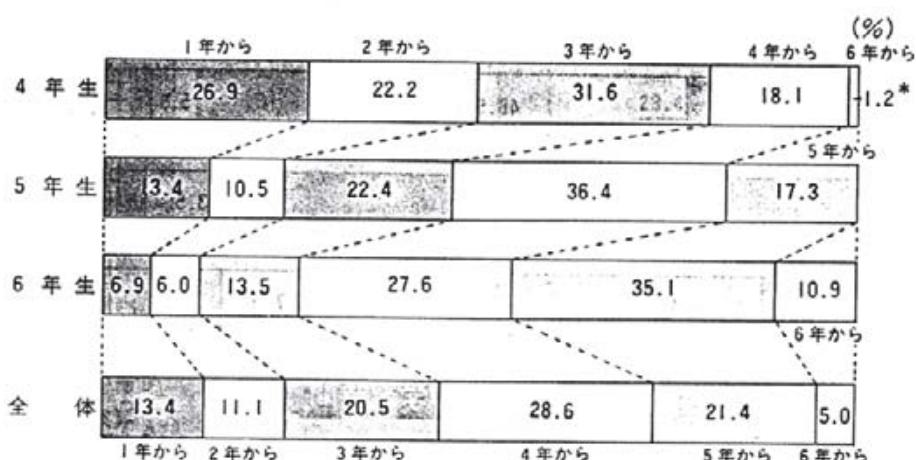


図14・夕食はだれと



図15・塾通いをはじめた時期



*は子どもの回答のまま

進学塾と補習塾

ひとくちに学習塾といっても、さまざまであり、その内容は多様化している。

ここでは、「学校の勉強のわからないところを教えてくれるような塾」を補習塾、「中学を受けるための塾」を進学塾と分け、残りを、他の塾とした。他の塾として、子どもたちがあげていたものは、「公文式の塾」であるとか、「学校より進んでやってくれる塾」とか、「力を伸ばしてくれる塾」というようなものであった。

本調査では、図16で示したように、進学塾

37%、補習塾41%、その他の塾22%と分かれている。

それぞれの塾にどの程度の学力の子どもたちが行っているのかをみたものが、図17である。

進学塾は、中学進学をめざしているだけに、クラスの中でもわりとできる子が多く、学習塾に行くようになった理由も、「進学のため」「将来役に立つから」「今よりも力をつける」と、自らの意志としてはっきりしている(表2)。

いっぽう、補習塾は、補習という言葉があ

まりピッタリしない。学習の理解度や、成績をみても、特に理解できていないというようすはみられず、クラスの中でも平均的な学力の子が多いようである。それだけに、学習塾に行くようになった理由も、「学校の勉強がわからないから」というよりも、「力をつけたい」、「将来役にたつかる」など、ここでも子どもたちの上昇志向がみてとれる。

しかし、「家の人に言われたから」という理由も56%というように、親からおしりをたたかれながら来ている子どもも多いようである。

最後に表3に、進学塾と補習塾の、塾での生活を比較してのせておいた。進学塾のほうが、通塾の日数や時間が長いだけに、帰宅時刻の遅れが目につき、それだけに、子どもの生活

図16・塾のタイプ別通塾率

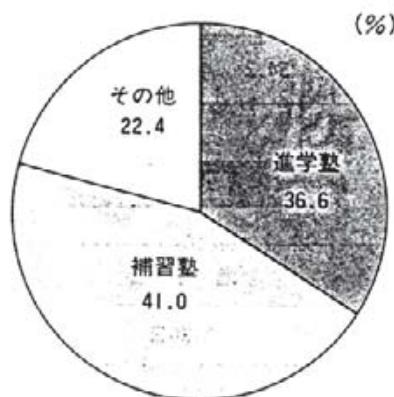


図17・塾のタイプによる理解度および成績の差

(理 解 度)		(%)				
		全部 わかる	だいたい わかる	わから ない 時もある	わから ない が多い	いつも わから ない
補習塾	19.1%	44.2	38.0	43.8	8.1	1.4
2.5						
進学塾	18.6	58.1	21.3	1.6	0.4	

(学校の成績)						
		上	中の上	中	中の下	下
補習塾	11.8	16.1	48.1	16.5	7.5	
2.5						
進学塾	23.3	30.1	38.6	4.8	3.2	

を乱している印象を受ける。

なお、この調査の中では、学力の下位の子どもたちの姿が浮かんでこなかった。彼らは

進学塾はむろんのこと、補習塾へも通っていない。学力アップをあきらめたのであろうか。

表2・学習塾に行くようになった理由(ベスト3)

(%)

進 学 塾			補 習 塾		
1 進学のため	79.8	1 今より勉強ができるようになりたい	69.8		
2 将来役に立つ	59.1	2 家の人に言われた	55.5		
3 今より勉強ができるようになりたい	54.2	3 将来役に立つ	51.7		

表3・塾での生活

項目	塾のタイプ	進 学 塾	補 習 塾
1. 通塾平均日数 (1週間につき)		3.38日	2.57日
2. 平均勉強時間		2.98時間	2.09時間
3. 何年生から(平均)		3.83年生	3.49年生
4. 家から塾までの距離	家の近く バス・電車をつかう	(48.6%) (48.9%)	家の近く(85.8%)
5. 夕食(家族一緒に食べる)		71.3%	83.9%
6. 帰宅時間(平均)		8時	6時30分
7. 算数		92.9%	91.9%
8. 英語		89.3%	71.4%
9. 理科		66.8%	27.9%
10. 社会		64.4%	27.6%
11. 塾の友達たち	わりと多くいる	まあまあいる	
12. 塾は楽しい (とても楽しい+わりと楽しい)		79.4%	74.8%
13. 4年生		10.5%	56.6%
14. 5年生		36.6%	42.5%
15. 6年生		48.3%	32.9%